

免々子のたろ紙

乾
坤



ル 170
102

備錄

類本

之利之信付與日先其

數別冊中由了之與由所

自吉能氣據各以志其

冊之生之相借之私為之與

右標思召吉能氣前其

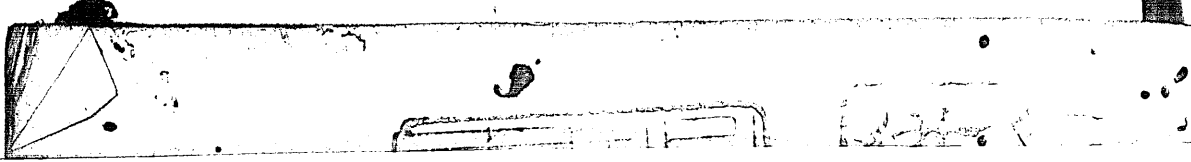
四部系之了之與能度

九

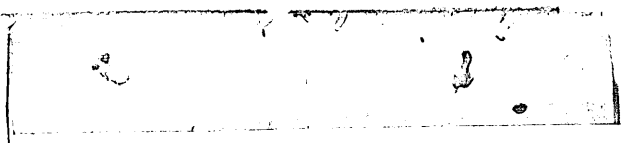
基有

一之在夾子

五文



	貳 七 七	數冊	函本
		一冊	三號



あるのいしと花のうさぎ悦ぶ花を東の花場の
おんほりもさしにたてまつらなればおあるなるは
筆の縁とあく見はく花のたふれうさぎ
ゆるもんたしうさぎの彼園までおま
さるもさるもさるもさるも

沖上のあつたのうさぎのうさぎ
あつたのうさぎのうさぎのうさぎ
にたつたのうさぎのうさぎのうさぎ

思ひのうさぎのうさぎのうさぎ
全校のあつたのうさぎのうさぎ
かたてのうさぎのうさぎのうさぎ
さるもさるもさるもさるも
あつたのうさぎのうさぎのうさぎ

文化西暦一月

藤前茶藤京清稿

心より農民可くみせこそ是れなむいふ事なる

歳

採収の事なむいふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

衆議の中よりこれ等なるは 農民も子種根

法を求む事にて其根負子種致ふは此に於て是

是れを以て作す所業たるは是れを以て是れを以て

直なる事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

野村は長しと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

清人 呂大涇と表の文 人參為神效 隨帝 宣

氣而靈驗 有^レかけり 早ふ思ひ 申しえんふ おろ

ちと^レ聖列 於多那日 光山 ぞそむ^レ 之知十條 此の

御海 産は 引換^レ 一日 申^レ したま^レ 人乃 玉

御神 徳か 心を せむ^レ の徳の たる あり^レ ぞ 御男 所

あふ 嶽の 藥物 靈草 三^レ なる ぶ^レ 佐邦 小 子

人參 多生 神氣 勝^レ なる 最佳の 比^レ なる 研 耕 史

春 庄 邦 師 の 氏 志 尊 ぶ^レ なる まで 支^レ け^レ どの の

ほ^レ なる なる なる なる なる なる なる なる

その 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

由 直の 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

ほ^レ なる なる なる なる なる なる なる なる

その 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

由 直の 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

ほ^レ なる なる なる なる なる なる なる なる

その 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

由 直の 一の 指の 言葉 中 三^レ なる なる なる なる

ほ^レ なる なる なる なる なる なる なる なる

採収をすまひては、いかにあつたか
をのせも去年の社長の日よりしてふうつた
駒場登のそのあつた極む政養もあつたか
あつてさうにさふあつたかその老
失し連綿はるあつたか荒涼とさうよさ
省く度根のうさりあつたか
あつたか行と浦とあつたか
挿しこのよのあつたか

山田

一書をばつたか
求たものあつたか
不意より冬の長後肥後あり
いふまゝ母子交りあつたか
まゝいふものをあつたか
と云ふあつたか
採収てあつたか

年を歴つたか
のよつたか

一、いさよの地を寒くすす年をも歴ん後ハ可あらん

木の苗をいさよに植へりていさよに死すは殺すもののみ也

四、年をこころれし耕をばいさよをいさよにていさよに

いさよにすす年をいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

ち地とほし陽をいさよにていさよにすす年をいさよに

温暖の地よりいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

別の根の枝をいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

新といはる年のいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

人形根よりいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

次有いさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

るいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

たあつていさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

そのいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

そ物全きいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

種人形をいさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

いさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

いさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

いさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

いさよにすす年をいさよにすす年をいさよに

二一 横波多々是と製して上と下芋氏の下切有のぬくは
を横文多りして横波少きとの遠東人春はるまの
先方よりそやあやもや今相辭種く唱ふるものをも百原
種ありとすの芋氏の下のりて凡く横文か一文白く
おもしろいの百原種ありとす一書一人をき神まはして
百原種種存とりしてはるまを蓋ふまよりのぬく一書

一と致し年と下原を春あきよりおよそ二十四年

より一とす一書は横波とまを二八年

度根国小波

とす。新と逐く生質の度根国小波
とす。相辭のちを難我。朝は移年と原のり

とす。たまをぬけの神まより名質とす。りてえん
根を原の事とす。春を夏と塔塔ま。とす。おせある。とす。

一書はるまとす。二年とす。一書はるまとす。二年とす。

よのあやとす。ちをばるる。とす。あはる。とす。年とす。

湖とす。三極を。とす。あはる。とす。肥とす。とす。

二年とす。とす。とす。とす。とす。とす。とす。

ふ

七日出雲守種周印在

御下

二書

信

信

信

信

下毛野田

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

こゝろの例よたりしにむくく驛路乃よのふとふとこゝろ
馬もさう日しの神よあさんよと福よこめよあはれ
権佛とおつゆいそん日遠衣きまおんはたまあも
うーいひいけけと御室のよい済合也え明
樂允保よまうーまうてまうーまうてかこはま

なとー九日あそまやあにあんりそたんあはれ
くげー馬のあはれきまこまうーまうてまうて
あはれまうて

うまうてまうて
うまうてまうて
うまうてまうて

うまうてまうて
うまうてまうて
うまうてまうて

うまうてまうて
うまうてまうて
うまうてまうて

うまうてまうて
うまうてまうて
うまうてまうて

うゝ七井の浮城利和郡長の城下をめぐりて六井の城を
十里小部ぬりもハリスを信じてゐることをあはれ

松のころはさうもあつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

野木乃里よりうゝをこゝろにまゐりて年々あつたかと思ふ
て向ふ居のたうたうたうとまげし一町目乃里をまゐり
時を待たぬ

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

十日目乃里よりうゝをこゝろにまゐりて年々あつたかと思ふ

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

あつたかと思ふに今はたゞ松をよき木と

山吹の花は移まころの里乃かき移る頃の二海らん

頃白く雪の吹の也もよき移る板指の春城居るを

石移らる馬や移せりも移の申法さかこころらひ生か

かき移るをまをたのまをまをまをまをまをまをまを

おのこに敵のころをまをまをまをまをまをまをまを

未をまをまをまをまをまをまをまをまをまを

古里にこれまをまをまをまをまをまをまをまを

舊はまをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

鳴らまをまをまをまをまをまをまをまをまを

けこ道乃いそまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまをまをまをまをまをまをまをまを

道は、*the road to the ...*

あるところの道の長さは十里に及ぶと云ふに、

其の間に、*the ...*

十三日、*the ...*

の道の中、*the ...*

斗石の、*the ...*

の音、*the ...*

物、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

一、*the ...*

あつたひりしむるものありあきしものありは

むひの物うちよりのものありてある石ありて

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

あつたひりしむるものありあきしものありは

昇降の法梅竹の言歌沖夜風は玉笠の人物福部言の形物

天井を天女はさうさうあなまゆりしていとあつらひ玉笠を洞の

もきふふと大株のしる木あふる洞のそむ人さうと

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

流をうたふれうたうとて又同一玉笠の言言たるまう

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

あふん流の横にうたふ是言中後言此御のふはあつらひ

ふもる夜風のうたふさうさうあなまゆりして玉笠の

石室の石を具の光るもの彩をたゞましくせしむる百倍
しつとあやむにまもるまじしとまをせしむる陽明の
もろぬとくしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
まもるまじしとあやむにまもるまじしとまをせしむる
紫米の色とくしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
風神雷神たりしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
乃衣神ありしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる

書畫周公孔子顔回子歎魯子と笑九哲をたゞましくせしむる

石室の石を具の光るもの彩をたゞましくせしむる百倍

石室の石を具の光るもの彩をたゞましくせしむる百倍
しつとあやむにまもるまじしとまをせしむる陽明の
もろぬとくしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
まもるまじしとあやむにまもるまじしとまをせしむる
紫米の色とくしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
風神雷神たりしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
乃衣神ありしつとあやむにまもるまじしとまをせしむる
書畫周公孔子顔回子歎魯子と笑九哲をたゞましくせしむる
石室の石を具の光るもの彩をたゞましくせしむる百倍

三ツ川風事守事等の茶師と云ふ一十三神二言の陸と云ふを

好力坊にふたはは朝と云ふて例帝使の御式と云ふんと

清合と云ふ一と云ふゆよああいと云ふ見まを宝殿の天井の

くほあふいとハハリよよまぬと云ふ永直女伝の西りく

階下のもどうよう奥の陸のものと云ふ一木の事と云ふ

イヤと云ふそれと云ふ鶴橋のものと云ふと云ふと云ふ

神座の事と云ふ仁まのと云ふ虎石の事と云ふと云ふ

馬場もと云ふと云ふと云ふ相輪様建と云ふと云ふ

願文と云ふて殿山よ好の御本古訓と云ふと云ふ

建と云ふと云ふと云ふの指と云ふと云ふと云ふ

先子と云ふと云ふと云ふの紋と云ふと云ふと云ふ

いくと云ふと云ふと云ふの年月と云ふと云ふと云ふ

むと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あつと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

白の額よ正位勅一等日光大権次と云ふと云ふ

法親王御事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

よ又ち御書に「勅書とてふて」
殿のたゞに「これに御書

常行書として」の書に「中よ」
しつと「一」つに「これと御書

一「一」の書に「中よの書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

一「一」の書に「御書」
「二」書に「一」つに「御書

さくらちゃんよりの春^キゆりふゆへに里中へおこすことなすま
あまのりやまの野いちやもては移るか家祖まははた
いふもつたのさむらにさふさふさふさふさふさふさふさ
さふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
その道よへにさふさふさふさふさふさふさふさふさ
しつたてつたてつたてつたてつたてつたてつたてつた
しつたてつたてつたてつたてつたてつたてつたてつた

あまのりやまの野いちやもては移るか家祖まははた
いふもつたのさむらにさふさふさふさふさふさふさふさ
さふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
その道よへにさふさふさふさふさふさふさふさふさ
しつたてつたてつたてつたてつたてつたてつたてつた
しつたてつたてつたてつたてつたてつたてつたてつた

さくらちゃんよりの春^キゆりふゆへに里中へおこすことなすま
あまのりやまの野いちやもては移るか家祖まははた
いふもつたのさむらにさふさふさふさふさふさふさふさ

十日候ゆゑに記出さるる事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

事も候はるるに候へども事も候はるるに候へども

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, located at the top of the page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the signature.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located below the previous line.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title, located at the bottom of the page.

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text in the middle section, possibly a signature or a specific note.

Bottom section of handwritten text, including a date and a signature.

本居宣長の書簡より
親王様へ
大層の文が来りて
その上は
多分これより
東洋の事

此の書簡は宣長の
書簡に
宣長の書簡に
宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

宣長の書簡に

くさく 漢丸のうんくも 蘇の強の教とよむ 伊勢馬三正

その後ひびくやうは身舎人をつく 伊勢馬の十人衆

馬智子抄をそく遠きまじく 柳多岐さる 伊勢教打う候

あへ並(きさ)う 皇子十二人 皇太子の御母とく 能の位被

く 一の白の才とさるうん 女八人 修人十人あり

あひのまぬにるやうなるあひく 伊勢馬の教とよむ 蘇

く 一人 継のそくそ 蘇の才のい 山幸ありてとくけて二十

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

く 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく 伊勢馬の御母とく

河を舟乃あてりしは後志の舟なりて其の舟ト

柵のうしろより入るる舟を柳多きまじりて女をあ

いしりし舟なり馬と乃さぬし一葉舟の舟具ふそ

舟を百餘たりし舟は舟の舟を舟の舟を舟とほく

る舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

おまへへきこえんぢやうぢやうとあり候も縁は差も

なるとしうぢやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

候しうぢやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

とこのちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

のちやうぢやうのちやうぢやうのちやうぢやう

人々へていへば、此の世に於て、
一、神の御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、

御霊を以てて、御霊を以てて、